Narukyo-Kawaraban

鳴教かわら版 No. 21

学長×教育長　対談

高知県 長岡教育長，佐古学長，徳島県 榊教育長

佐古学長の希望により，本学大学院修了生である徳島県 榊浩一教育長，高知県 長岡幹泰教育長との対談を行いました（令和５年７月19日（水）実施）。

佐古学長《以下，学長》 本日は，お忙しいところお越し下さりありがとうございます。本学大学院の修了生であるお二人の先生が，徳島県・高知県の教育長をなさっているということで，我々在籍している者にとりましても，また修了された方々にとりましても非常に誇らしいことと思っております。この機会に，鳴教時代の思い出や様子，また鳴教での学びがお二人の今の仕事にどのように役立っているのかということも含めて，お聞きできればと思っております。

さて，お二人は随分前に本学大学院を修了されておりますが，まずその頃の大学の風景は，どの様な感じでしたか？これは創立５周年の時に作成した記念誌で，1986～87年頃，恐らく榊先生のご入学か，それ前後かと思います。

榊教育長《以下，榊》 そうですね，こんな感じですね。まだ建物が少なく，図書館を造っている最中でしたね。

長岡教育長《以下，長岡》 僕の時も，今のような建物はほとんどなかったですね。下宿が少しあったぐらいかな。僕は学生宿舎の８号棟に住んでいましたが，周りには当然コンビニもなかったですし。

《学長》 鳴門教育大学での在学中，院生の思い出として何か印象に残っているようなことはございますでしょうか？

《長岡》 それはたくさん残っています。例えば授業で言うと，僕の場合は生徒指導でしたので，前学長の山下先生がよく絵本を持って来られて，その中で「幼児期の体験がやはり大切である」というようなお話をされて。そこから「この絵本にはこういう意味がある」というお話を色々していただいたことをよく覚えています。合わせて，山下先生のゼミにおりましたので，論文指導以外にもタッチフットボールなどにも誘っていただきました。

《榊》 修士論文の中間発表に向けて，皆で中間発表の「模擬発表みたいなのをやらんか」となって，皆で宿に泊まって，お昼は各発表者と模擬審査員に分かれて，その発表に対して意見を言う，そのような合宿をしたことが思い出に残っていますね。

《学長》 ところで，お二人の修士論文はどのようなテーマだったんですか？

《長岡》 僕は，「万引き・非行の心理学的考察」だったかな。不登校をテーマにするのか，非行を主題にしようかということで色々迷っていたのですが，基本的

なところは同じだろうというところで。僕の場合は当時「遊び型非行」と言われ，全国的に広がっていた万引きを主な題材としました。学生や院生，友人等の協力のもと,「どうして万引きをしてしまったか？」「何がそうさせたのか？」あるいは「なぜ万引き等を行わなかったのか？」といったようなことをインタビューし，各事例を比較・検討する研究方法をとりました。

《学長》　何か，面白い結果が出ましたか？

《長岡》　それぞれに特徴的な，直接的な理由はなかなか言えないところですけども，皆さん，何らかのプレッシャーや不安，苛立ちとかそういったものが心の底にあって，それをどういう風に表現するのか，あるいは解消していくのか，そういう過程の中で意識的，無意識的に生じるということでした。

《学長》　榊先生はいかがですか，修士論文は？

《榊》　私は教育心理の分野で「精神発達遅滞児の内発的動機付けに関する一考察」という硬いテーマでした。ただ，知的障害という言い方はしておらず，

徳島県教育委員会教育長　榊　浩一　氏
鳴門教育大学大学院障害児教育専攻の第１期生
徳島大学卒業後，ストレートマスターとして進学

精神発達遅滞という言い方をしていたので，子どもたちの動機付けに外的報酬がどう影響するのか，というような内容だったと思います。しかし，結果的に先行研究にあるような結果がたぶん出なかったと思うんですよ。では，それをどう解釈するかということを指導教員の田中道治先生にご指導いただいて，それは，原因はここじゃないのかとか，こういう風な推察ができるんじゃないのかというようなことをやったのを覚えていますね。

《学長》　鳴門教育大学に期待することがおありでしたら伺いたいのですが。

《長岡》　僕は高知県から鳴教に来ている先生には，この２年間は“〇〇学校の先生”というアイデンティティは少し横に置いておいて，“鳴門教育大学で研究を進める者,院生”という面を大切にしてほしいと思います。

　そのような意味では，鳴門教育大学の学びはやはり最先端であってほしいし，全国区であってほしい。そういう学びを提供していただきたい。

《学長》　鳴教での学びが，その後の仕事に役立っていることはありますか？

《榊》　先ほどの修士論文の話に関係しますが,結果が,自分が思っていない結論だった時の対応の仕方，どういう風に解釈をして，どういう風に理解していくのかというのは，実験的には失敗だったのかも知れませんが，そういう思考の方向性というのが現場に出てからも参考になったというか，使えたんじゃないかと思います。今から思えばね。

　やっぱり大学院で一番印象に残ったことというのは修士論文を書く過程，修士論文を作っていく過程での思考の方向性ですね。エビデンスに基づいたものというのをどう作り上げていくか。私は特別支援教育の人間なので，それまでの障害児教育とか特別支援学校の教育，小学校も含めてだと思いますが，学校の先生方の評価というのが，数値的なものを評価の基準にするというのが，まだ見えない時代だったんですよ。

　それで，先生方から子どもの評価を親に伝える際は「目がキラキラしています」とか，「笑顔がいっぱいになります」とか，そういうアバウトな評価だったんですけど，それでは子どもの行動とか活動を評価して変えていくことができません。

　評価についてどう考えるか，どう捉えているかというのが研究を進める上でのスタートラインになるのですが，それは，大学院の中で修士論文などを書く過程で,基本になるようなものを学ばせていただきました。それが現状の活動には活かせられているんじゃないかと思います。

《長岡》　今までは感覚で，経験だけで経営をしていた，あるいは教科指導をしていたのが，やはりその基になる理論というものがしっかりすることによって，今までやっていたのはここが良かったのか，ここがマズかったのかなというような，自分の経験を振り返る

高知県教育委員会教育長　長岡幹泰　氏
現職派遣院生として生徒指導コースに入学
当時の指導教員は，後に第７代学長となる山下一夫氏

ことができました。

そして,現場に帰った時にはもう少し理論をもって,理屈をもって指導に当たることができる。保護者の方にも，あるいは同僚にも，子どもにも，なぜこれをするべきなのか，あるいはなぜしないのかというような説明ができました。今で言う理論と実践の往還，そういったことを考え，感じさせていただきました。

併せて，やはり今までとは違う視点を持たせていただいたというのはありますね。例えば，大反省の部分なのですが「子どもはこうあるべきだ」という自分の経験からの子ども像というのがあって，それに子どもたちを合わせようとしていたところがありました。しかし，ここで勉強させていただくことによって，そういう一元的な考え方を多少なりとも崩すことができたと思います。子どもを見る視点は一つではなく，もっと違う視点があるべきなんだ，あって当然なんだということで,子どもを迎え入れる懐も深くなり,広くなったように思います。

そういう意味で，やはり経験だけではダメで，その経験を裏打ちする理論というものをしっかり身に付けないといけない。しかし，今度はまた理論だけでもダメで，そういったことの往還が非常に大切である。そういった視点から，大学院での学修というのは，適切な時期に適切に与えないといけない，そんな風には思います。

《榊》 今，学校現場は忙しいので，物事を深く考えたり整理したりする時間がないと思います。そこで，教員という仕事がルーティンになってしまって，新しい学びとか子どもたちの成長などが見えにくくなる，ということが一番怖い。ある程度の時期にきっちりリセットができる環境に置いてあげるというのが本当に大事なことだと思うんです。今までのキャリアを元に，新しく次のステージに行くための準備をしたいというような方について，そういったことをお手伝いできる環境の１つが鳴門教育大学だと思います。

《学長》 お二人は教職の魅力について，どのようにお考えですか？

《長岡》 教師は「この子どもの人生に関わる」「この子どもの今この時を共有する」という立場にあるということでしょうか。だから怖い部分はあるんですけど。その子に，その人の人生に影響するからこそ，人に対する愛情と本物の期待をもって子どもたちに接することが必要と思います。そしてまた，新しい文化，原理の創造の過程を師弟同行するという姿勢，態度が大切になってくると思います。

《榊》 私個人としては，教員の魅力，私が今まで教員としてやってきた魅力というのは，毎日新しいことがあるということです。子どもって毎日違うので，毎日接し方も変わってきますし，それで同じようにやっても結果が違うので，「なんで違うんだろう，どこがいかんかったんだろう，どこが良かったんだろう」と，毎日毎日新しいことを積み上げて積み重ねて，１年間終わったら「こんなに子どもが賢くなったんやな，できることが増えたな」という満足感ですね。毎日毎日新しい発見があって，新しいことに取り組んで，本当に退屈しない毎日が続いたら先生方にとっても，子どもにとっても良い日々が続くんだろうなという風には思いますけどね。

《学長》 お二人にこれからの教育長としての抱負をお聞きしておきたいと思うのですが,いかがでしょうか。

両教育長の思い出話に笑顔で応える佐古学長

《榊》 生成 AI というのは，本当にここ数年で目まぐるしく成長して，学校の教員の指導方法を著しく変える蓋然性が高いと思います。そういった時代に，先生方がどうやって対応するのかというようなことを早急に考えて,先生方の研修や子どもの研修,情報モラル・セキュリティをどうするのかということも含めて，IT・ICT・AI 教育というものに徳島県として遅れないようにと考えています。

それから，特別支援教育ですね。教育長が特別支援教育出身なので,これは他の県に負ける訳にはいかず,日本一を目指していかないといけないでしょう。

鳴教大さんに色々お力を借りることはこれからもたくさんあると思うのですけど，ご相談もさせていただきながら一歩一歩進めていければと思います。

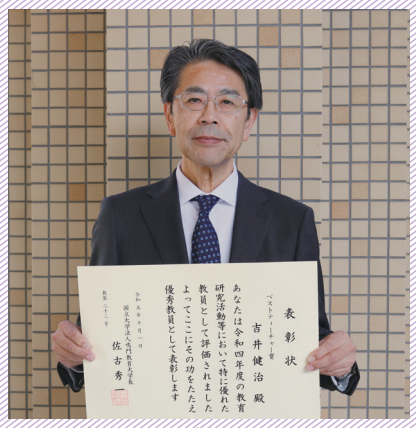
《長岡》 我々も本当にたくさん課題があって，悩むことがたくさんあります。特に高校の再編と入試制度改革，また，先ほど榊教育長も言われた ICT の活用。不登校や学力問題，教員の働き方改革などなど。そんな中で，教職員がやりがいをもって働ける，教育ができる環境をつくること，併せて，子どもたちがおもしろいと興味をもって明日を迎えられる授業を作ること。そのような思いをもって，現在，次期教育大綱，教育振興基本計画の策定に向けて検討を深めているところです。

《学長》 それでは，お二人，お忙しいところお越し頂きまして，改めてお礼を申し上げます。お二人のような素晴らしい OB を我々が持っているというのは，とても幸せなことだと思っております。

本日はありがとうございました。

鳴門教育大学優秀教員表彰

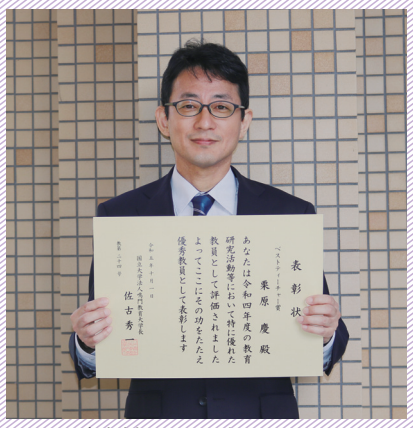
10月２日（月），2023（令和５）年度鳴門教育大学優秀教員表彰式を行いました。



吉井　健治（よしい　けんじ）教授
心理臨床コース

大学院で臨床心理士及び公認心理師の養成，教育相談の実践的力量を有する現職教員の育成に尽力してきた。学部授業では「教育相談論」を担当し，こうした学生の教育において不登校への理解と対応に努めてきたほか，生徒指導支援センター所長またはスタッフとして，附属学校スクールカウンセラーの運営・活動に多大に貢献し，附属学校の教育活動を支えてきた。

地域貢献では，県内の様々な不登校児童生徒支援事業において中心的な役割を務めるほか，教員のメンタルヘルス問題やいじめ・不登校に関する保護者対応にも貢献するなどの幅広い活動を評価。

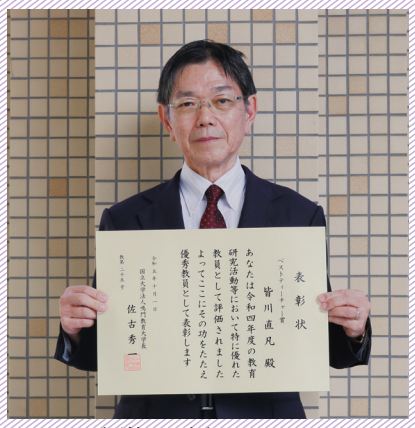


栗原　慶（くりはら　けい）教授
美術科教育コース

工芸分野に関する教育・研究を行っており，特に近年は日本伝統工芸展での継続した入選や伝統工芸四国展での受賞，公立美術館における企画個展の開催など，陶芸の実制作において顕著な業績をあげており，これらの制作発表時の解説や報道の機会を通して工芸の社会的価値の認知に努めている。

また，教育実習総合支援センターの教職大学院（教科･総合系）実習部門主任として教職大学院での実習運営に貢献している。

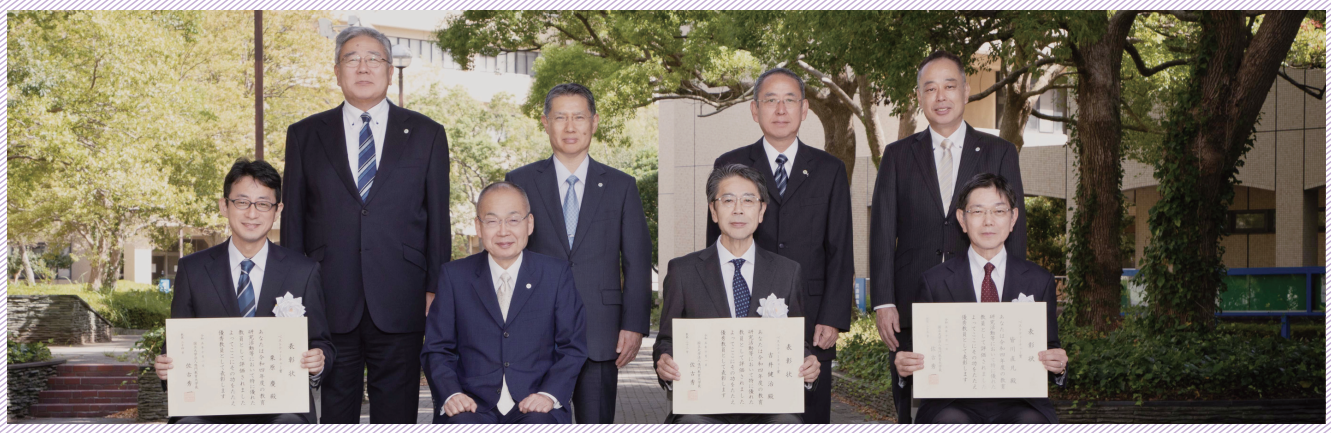
この他，四国国立５大学連携による連携教職課程設置WG（美術）委員等のメンバーとして大学運営においても尽力したことを評価。



皆川　直凡（みながわ　なおひろ）教授
学習指導力・ICT教育実践力開発コース

教育認知心理学を専門としており，多数の学生・院生の教育と研究指導に携わってきた。徳島県下の教員が開設した勉強会に助言者として参加し共同研究を進めるほか，「個別最適な学び」と「協働的な学び」の基盤となる「自己調整学習」や「言語教育」に関する実践的研究に取り組み，論文発表，講演等により研究成果を公表している。

教職大学院遠隔教育プログラムについては，学習指導力･ICT教育実践力開発コースのコース長として遠隔教育プログラム院生の指導に先導的に取り組み，実習校への訪問を丁寧に行うなど，伴走型実践指導に貢献したことを評価。



（前列左から）栗原教授，佐古学長，吉井教授，皆川教授　（後列左から）美馬理事，梅津理事，田中理事，高橋事務局長

鳴教かわら版（No.21）　2023（令和５）年11月発行
鳴門教育大学教務部入試課広報係
〒772-8502　徳島県鳴門市鳴門町高島字中島７４８番地
電話：088-687-6135　FAX：088-687-6138
URL：https://www.naruto-u.ac.jp/
国立大学法人
鳴門教育大学
Naruto University of Education